



駅前という便利な立地の北広島市図書館

市民が支える 図書館運営

～北広島市図書館～

札幌に隣接する人口約6万人の北広島市。JR北広島駅を降りて、まちの東西を結ぶ連絡橋「エルフィンパーク」を抜け、東側出口すぐ目の前にあるのが北広島市図書館です。市民が待ち望んでいた図書館が開館したのは1998年のこと。市民ボランティアによって支えられている北広島市図書館にお邪魔しました。



家庭文庫活動から図書館開設へ

今年10月に開館10年を迎える北広島市図書館。『日本の図書館 統計と名簿2006』（社）日本図書館協会）のデータを探ると、道内の市立図書館では人口100人当たりの貸出数は第2位、人口1人当たりの資料費は第4位と、市立図書館の中では充実したサービスが展開されていることをうかがわせます。入り口には、借りた本を入れて館内を歩き回ることができるようにカートが配置。紫外線で本を除菌する「除菌BOX」まであり、いきとどいた細かな気配りが感じられます。

現在も人口の微増が続く北広島市は、札幌のベットタウンとして知られています。道内最大といわれた約8,000戸の道営住宅団地が着工され、'71年から入居が開始されたことで、'70年代には人口増加率が2ケタを越す年もあるほど急激な発展を遂げてきました。多くのニュータウンと同じように、新住民には小さな子どもがいる世帯が多く、そうした家庭の母親は、子どもたちに本を読んでもらいたいという願いを持っていました。

その思いを受け止めたのが'74年に開館した当時の広島町立中央公民館図書室です。「当時はまだ家もまばらで、田んぼの真ん中に大きな建物がどんと建っているような状況でした。でも、わざわざ出かけていっても、がっかりという人が多かったのです」というのは、今も北広島市で自宅を開放して子どもたちに本の貸し出しを行う家庭文庫を開設している荒木順子さん。町も研修センターや公民館、住民センターなどに図書コーナーを新設し、社会教育活動車「かえで号」の運行や集会場での循環図書など、図書サービス機能を充実させていきますが、子どもたちへの読書普及を担ってきたのは、荒木さんのような

地域住民の家庭文庫でした。

'70～'80年代は全国的

に家庭文庫や親子文庫の動きがあり、北海道立図書館でも「家庭教育・親子文庫」の活動を推進していた背景があります。当時の広島町にも、「多くの子どもたちに読書のよこびと楽しさを伝え、良い読者環境づくり」をしていこうと家庭文庫が登場するようになり、'80年には家庭文庫を主宰する人たちによって、「子どもたちに身近なところで良い本との出会いをつくる」ことを願って「広島町文庫の会（現きたひろしま文庫の会）」が結成されます。

この年、同会のメンバーや中央公民館の職員によって、「読書まつり」が初めて開催されました。地元高校生の手づくり絵本の展示や、絵本の選び方と人形劇についての講演を行いました。予算はわずか8,000円、ほとんどが手弁当での準備でした。それでも200名以上の市民が参加し、その後、読み聞かせ会やおはなし会、紙芝居や人形劇など、徐々に内容を充実させ、現在も年1回開催されている事業です。「本好きな子どもが集まるだけでなく、まずは本を読むきっかけづくりをしようということでした」と荒木さん。企画から準備、当日の運営まで、手づくりのイベントで、今では市民にすっかり定着しています。

また、同会では、読書まつりや家庭文庫だけでなく、図書館常設場所がわかる「町の読書マップ」の作成など、子どもたちの読書普及に地道に尽力してきました。こうした活動の中で「司書の存在のありがたさを学んだ」とも荒木さんはいいます。「本をすすめるにも、どれがいい本なのかわからない。講演会を開催するにしても講師は誰がいいかわからない。初めて公民館図書室に司書が配置された時は本当にうれしかった。当初は自分たちの活動が自己満足で終わっていないかという不安でいっぱいでした」



「この図書館の特徴は、ボランティアなのか、職員なのかよく区別がつかないほど、職員とボランティアの距離が近いこと」と荒木さん



貸出は一人20冊まで。このため、カートは必需品

と、当時を振り返ります。

こうした活動が広がることで、「まちに図書館を」という思いが募っていくのは当然のこと。きたひろしま文庫の会が20年を記念して発刊した記念誌『小さな輪 大きくなあれ 20年の歩み』には、初代館長の坂本龍三氏の寄稿の中に「『私たちの町には、まだ図書館がありません。でも街のあちらこちらで小さな文庫活動が営まれています。(中略) たくさんの本のある充実した図書館を早くほしいですね』これこそ当時の文庫活動を続けている人たちの行政に向けてのメッセージであった」とあります。北広島市図書館は'98年に開館しましたが、それは市民の地道な活動と努力で勝ち取ったものといえるでしょう。

図書館を支えるボランティア活動

北広島市では、'80年代に文庫の会のみならず、「おはなしの会そらまめ」「人形劇サークルたまご座」など、読書普及を支えるさまざまなボランティア活動が始まり、読書まつりもこれらの団体との協働で進められるようになっていきました。こうしたボランティア活動が基盤にあったことが、「北広島市図書館フィールドネットワーク」(以下「Fネット」)につながっていきます。

Fネットは、生涯学習の場である図書館を拠点に、図書館サービスと連携しながらさまざまな事業を行う窓口、いわゆるボランティアグループのネットワークで、図書館の開館と同時に立ち上がりました。現在、10団



北広島市の正職員としては司書第1号という新谷さん

体が加盟し、約150人が活動しています。昨年28回を迎えた読書まつりはもちろん、人形劇や展示会、読まなくなった本を交換する「古本ばくりっこ」や「おはなしの会」など、さまざまな事業を主催するほか、資料部、社会部、児童部、福

祉部に分かれて、図書館と一体となって、図書館運営を支えています。例えば、資料部には「古本おたっしや倶楽部」が所属し、破損本を製本修理。福祉部には点訳サークルや朗読の会が所属するなど、それぞれボランティアグループの特徴を生かして、図書館サービスを支えているのです。

北広島市図書館では、'00年12月に「北広島市図書館資料充実プラン」を発表します。「新鮮で魅力的な情報を提供」「洗練された学習機会を提供」「確かな記録を保存」するなど資料収集のテーマと基本方針がまとめられ、運営に関する望ましい数値目標や現状分析、デジタルメディア情報提供や子どもの学習に役立つ資料収集提供、郷土資料や行政資料の収集に向けた取り組みなどがわかりやすくまとめられています。

「このプランを考える余裕が生まれたのは、Fネットの存在があったから」というのは、北広島市教育委員会生涯学習指導班参事、副館長も務める新谷良文さん。「図書館運営や各種の事業などを支えてくれたことで、行政がしっかりと考えなければいけないことに取り組むことができた」といいます。

北広島市図書館では、Fネットの活動の一つとして個人で登録するフロアワークボランティアの存在があります。接遇や配架の講習を受け、実技試験に合格すると、図書館内で返本や書架整理、OPAC^{*}の利用などの簡単な案内を好きな時間に好きなだけ行うボランティアで、約30名が活動しています。当初は、配架や案内のミスがあったときにカウンター職員にクレームがくるのではないかとという危惧もあったようですが、返本の迅速さや整頓された書架など、目に見える成果が徐々に職員の意識を変えていきました。

「フロアワークボランティアの活動では司書への橋渡しも大きな役割だと感じます」という荒木さんは、Fネットの事務局長も務めています。「司書の皆さんは本当に忙しい。利用者はこんなことを聞いてもいいのかな

※ OPAC

Online Public Access Catalogue の略。図書館において公共的に利用できるオンライン蔵書目録のこと。

と迷っても、黄色いエプロンをしたフロアワークボランティアになら同じ住民なので気軽に声かけられます。また、こんな本を読みたいとか、掲示板の文字が小さくて読めないとか、ちょっとした要望を拾い上げることができます」。ボランティアならではの対応が、図書館運営をよりニーズに沿った方向へ導き、市民に開かれた図書館へとつながっているのです。

また、フロアワークボランティアの存在が、モラルを守ることにもつながっています。閲覧した本をきちんと棚に戻すことはもちろん、不明本が減少するという効果が見られているのです。例えば、近隣の恵庭市立図書館の'06年度の不明本は823冊、千歳市立図書館は'07年度で794冊。一方、北広島市図書館は'07年度でわずか262冊。警報システムが導入されていないのに、格段に少ないことがわかります。

北広島市では'08年度予算編成から、各部が所管する事務事業の予算執行段階から創意工夫によって経費削減や収入の確保などが図られ、その効果が認められるものに対して、その一定額を翌年度インセンティブ（報奨）として上乘せする制度を導入することになっていますが、'07年度のプロアボランティアによる不明本の抑制に対するインセンティブが認められ、'08年度予算に243,000円の予算が配分されることになりました。「毎年開催している図書選定ツアーの資金にして利用者に還元できるように使っていければ」と新谷さん。行政側のこうした評価はボランティアの励みになるだけでなく、成果をしっかりと数値で示していくことの重要性を感じさせます。

サービス充実のかがは市民のサポート

北広島市図書館は、芸術文化ホールと一体になった建物にあり、1階が一般開架コーナーになっています。2階には、ビデオ上映会を開催しているAVサロンやオーディオコーナー、読書室があり、図書館活動を支えて



学生向けの読書室とは別に成人向けの空間を確保している



毎週水曜日に上映会を開催しているAVサロン

いるボランティアの人たちの拠点であるボランティア活動室も完備されています。図書館開館前からボランティアグループがさまざまな活動を行ってきた経験をもとに、作業室や倉庫も配置され、手づくりで行ってきた事業が行政側にも理解を得られていることが感じられます。

Fネットの存在があることで、図書館が学校の読書をしっかりとサポートする体制も整っています。市内の全小学校を対象に35冊の児童書を木箱に入れて学校間を巡回させる「豆次郎」の導入。中学校に対しては、既存の図書館の図書整理や蔵書の移管・配置を行うほか、管理システムを導入し、モデル的にリニューアルする「豆太郎」など、さまざまなバックアップ体制が敷かれています。



会議もできる広い空間のボランティア活動室



木箱で小学校の学級に本を配置する「豆次郎」

また、近年は、インターネットが情報入手の大きな手段になっていますが、'03年に開設された生涯学習支援情報サイト「学び舎・楓（まなびや・ふう）」は、地域情報を気軽に取り出せる貴重な情報源になっています。市内のイベントや講座、施設やその空き状況、各種の団体や講師などが分類別や地域別、キーワードなどで検索ができ、暮らしの情報を自宅に居ながらにして取り出せるのです。サイト内には、教材・資料として図書館が保存してきた情報もデータベース化されています。広報記事や議会会議録はもちろん、昔の写真約1,500枚がデジタル情報で閲覧できる「ふるさと写真館」や、古老の話を文書化した「きたひろ採話集」など、地域の郷土資料もインターネット上から簡単に取り出せ、わざわざ図書館に行かずとも、さまざまな情報を入手するこ

とができるのです。

「Fネットの存在が図書館職員の専門的な能力を生かせる環境をつくってくれているのです。郷土資料もきちんと情報提供しようと、『学び舎・楓』のサイトも図書館側がしっかり責任を持って取り組みました。学校図書館についても、現在、市内全小中学校図書館をオンラインで結ぶネットワークシステムを準備中です」と新谷さん。このほかにもwebやメールを活用した通信講座「ネット塾きたひろ」の開講や、登録したキーワードで新館案内や雑誌記事コンテンツをメールで送信してくれる新着情報サービスなどの先進的な情報サービスが打ち出されています。

市民が支える「市民の書齋」、それが北広島市図書館といえるでしょう。ボランティアが活動している図書館は少なくありませんが、図書館と一体となって、ここまでの「協働」を成立させているところはあまり多くはないのではないのでしょうか。ボランティアが支えることで、図書館が果たすべき機能が広がり、それがまた市民の利益につながってゆく。北広島市図書館では、それが実践されています。

